

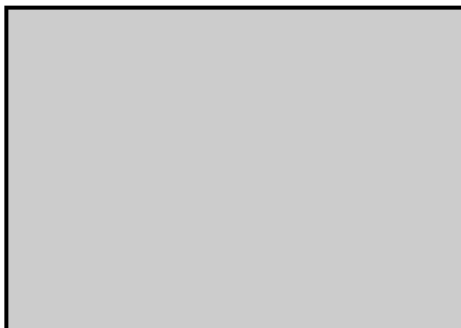
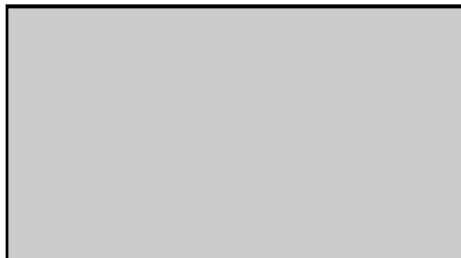
東洋への遠いまなざし—ジェームズ・アンソール展より—

アンソール展をご覧になった皆様は、彼が描き出す多種多様な世界に驚かれることでしょう。初期の作品に見られるような、身近な景色や人物を沈んだ色調で描くリアリズムの色濃い画風から、徐々に画面が明るくなり、印象主義をも想起させるタッチが顔を見せ始めたかと思うと、画家のトレードマークでもある、仮面や空想上の生き物たちが闊歩する、幻想的な世界へと広がっていきます。

そんな中、私たちにとって馴染み深いモチーフが顔を見せる一角があります。着物に日本髪を結った人物が描かれた団扇があるかと思えば、アンソールによって装飾された扇まで見受けられます。

19世紀後半のヨーロッパでは、日本の美術工芸に対して強い関心を向け、そこから制作のインスピレーションを得た芸術家たちが多くいました(その代表が印象主義の画家たちです)。アンソールが活躍したのはそのような時代でした。彼の場合は、さらに自身の家庭環境が大きな影響を与えていました。アンソールの家族は海水浴場として人気のあったオーステンドで、観光客相手の土産物屋を営み生計を立てていました。その中に東洋の国々からもたらされた陶磁器や置物、錦絵などが含まれていたのです。アンソールにとって、それらは新奇なものでありながら、同時に馴染み深いものだったといえるでしょう。

アンソールにとっての日本美術は、画面に彩りを添えるモチーフ源にとどまりません。彼の素描の中には日本の絵画を模写したと考えられるものが存在します。近年の研究により、これらは実は葛飾北斎の『北斎漫画』を写したものであることが明らかになりました。展覧会では実際の北斎の作品とアンソールの素描を比較しながらご覧いただけます。油絵では奔放な作風を楽しむかに見える異端児ア



※東京都庭園美術館の展示風景から

ンソールが、素描では意外に丁寧で忠実な模写をしていることがお分かり頂けるでしょう。

アンソールの東洋への傾倒は、単に物珍しいものへの酔狂な関心で終わらず、彼の作風を語る上では必ずこのできない「グロテスク」な絵画へとつながっていきます。ヨーロッパ文化とは異なる基盤にたつ東洋の文化に触れることで、アンソールは他の画家たちとは異なる独自のビジョンを築く鍵を手に入れたと言えるでしょう。(ly)